

頭部MRI検査における吸引固定バッグの使用経験

山田 諭史¹、篠田 淳²、浅野 好孝²、福山 誠介^{1,2}、奥村 竜児¹、糟谷 幸徳^{1,2}、山口 浩和¹、
山田 裕一¹、小川 大輔¹、土谷 祐輔¹

¹木沢記念病院 放射線技術部、²中部療護センター 脳神経外科

【目的】 頭部MRI検査における吸引式固定バッグの有用性について検討した。【方法】 対象は、2009年9月から2012年3月までに、高次脳機能障害で3テスラMRIを施行した76名（男性：52名 女性：24名）で、従来から行っていたスポンジによる頭部固定と、吸引式固定バッグを使用した頭部固定の2群に分けた。検討項目は、頭部MRI検査において患者の体動による再スキャン件数、省略されたオーダー件数、鎮静剤を使用した件数を2群間で比較検討した。また同一患者における両群でのT2画像、FLAIR画像を、放射線技師で視覚評価した。【結果】 吸引式固定バッグを使用した群は、スポンジによって固定した群に比べ、再スキャン件数、省略されたオーダー件数、鎮静剤を使用した件数とも有意に減少した ($p < 0.01$)。同一患者における吸引式固定バッグを使用した群では、T2画像、FLAIR画像ともに動きによるアーチファクトが少なく、良好な画質が得られた。【考察】 吸引式固定バッグを使用することで、患者への負担を低減しつつ、頭部MRI検査の効率を上げることが可能となった。また、アーチファクトの軽減により画質が向上することで、より正確な画像診断が行えることが示唆される。